

# 2020年度 長久手市文化の家 福祉事業評価報告書



## はじめに

2018年度から試行的に始めた福祉事業は多くの方々の参加と協力を得、注目すべき成果を残すことができた。2020年度はそれまで得た成果をもとに、さらに事業を発展させていこう、そう考えていた矢先、新型コロナウイルス感染拡大を受け計画していた事業の大幅な見直しを強いられることになった。2月末から演奏の機会が減り始め、4月に発出された愛知県の緊急事態宣言が決定打となり、福祉事業はおろかホールから、そしてまち全体から、音楽が消えていった。

いったい誰がこんな事態を予想しただろう。未知の感染症に対する恐れは大きく、「ステイホーム」の掛け声のもと、人々は自宅で長時間過ごすことを余儀なくされ、音楽家たちは演奏の場を失った。どうすれば再び音楽を楽しむことができるようになるのだろうか。当時、先の見通しは全く立たなかった。それでも人々はただ、呆然と立ち尽くしていたわけではない。文化芸術を楽しむ時間を取り戻すべく、各地で試行錯誤が繰り返され続けた。初夏になる頃、まちに少しずつ音楽が戻ってきた。

一方、社会福祉の現場では、混乱は長く続くこととなった。基礎疾患を有する人が多く入所する高齢者・障害者施設では感染防止対策を徹底させ、ボランティアはおろか家族でさえ施設に立ち入ることができなくなった。その期間は長期に及び、1年が経過してもなお、家族との面会はアクリル板越しで短時間、ボランティアによる余暇活動もほぼ停止している状況である。クラスターが発生すれば入所者の命に危険が及ぶことを考え、これまで家族とのつながりや地域との交流を大切にしていた福祉施設はその門を閉ざさざるを得なくなった。さぞかし苦渋の決断だっただろう。福祉施設は入所されている人々が日々の生活を営む場である。喜びを分かち合い、美しいものに心動かされる、そのような機会まで奪われてよいはずはない。入所者の生活を豊かにする彩、ゆとり、人々との温かいコミュニケーションをいかに取り戻していくのが今、問われている。

この1年は、長久手市文化の家としても、試行錯誤の連続だった。自分たちは何をすべきなのか、そして何ができるのか。2020年度に失ったものは大きいですが、得たものも確実に存在する。本報告書では、文化の家が2020年度を通して行った福祉事業を振り返り、その活動の意義と成果について考えてみたい。

## 第1章 2019年度までの福祉事業の振り返りと実施目標（2020年1月時点）

本章では、はじめに2019年度の報告書をもとに、これまでに実施した4つの事業（サックスカフェ、初クラ講座、ふくしであーと、依頼演奏 in 医療福祉領域）を概観し、年度末に立てた2020年度のスケジュール案について確認する。

### 1. 2019年度の実施内容（振り返り）

#### ①サックスカフェ

企画の主旨は地域での高齢者の仲間づくりである。会場は文化の家・光のホール、講師はフランチャイズアーティストの石川貴憲（サクソフォン）、対象は55歳以上の男性、参加無料、7月から9月まで毎週1回、火曜日18:00-19:30の時間帯で実施した。参加者は広報での募集に応じた12名であった。講座の前半は音出しと全体演奏、後半は全体演奏に加え、集大成となる発表会に向け個々の曲の練習、講師による個別指導を行った。

#### ②初クラ講座

企画の主旨は高齢者が定年後、趣味の一つとしてクラシック音楽を楽しめるようになることである。11月から2020年1月にかけて、火曜あるいは水曜の19:00-20:10の時間帯、6回シリーズで講座を実施した。参加は広報で呼びかけ、会場は文化の家・光のホール、講師は主として西野裕之（宗次ホール副支配人）が担当し、第2回に福田勝太（ヴァイオリン奏者）、第5回に石川貴憲（文化の家 フランチャイズアーティスト）、第6回に生田創（文化の家事務局長補佐兼事業係長）がゲスト出演した。

#### ③ふくしであーと

企画の主旨は福祉施設や病院などにおいて、福祉の価値観に基づき、利用者の抱える課題の解決に音楽を「活用」することを意図し、演奏活動を行うというものである。市内では愛知たいようの杜（高齢者）、百千鳥（障害者）、市外では夢の家（障害者）、愛知小児保健医療総合センター（病児）、南生協病院緩和ケア病棟（病者）を訪問した。

#### ④依頼演奏 in 医療福祉領域

企画の主旨は行政連携である。市の長寿課等から依頼を受け、オレンジクレーテ・カフェ、いきいきライフパーティーでの演奏を行った。サロン活動では社会福祉協議会と連携し、高齢者や多世代交流を目的としたサロンで演奏を行った。その他、集会所や個人宅などを会場とし、音楽を通じて地域の人々との交流を促進する活動を行った。

## 2. 2019年度の各活動の振り返り

①～④の各活動について、昨年度報告書では今後の課題として以下の指摘を行った。

### ①サックスカフェ

この企画の満足度は高く、参加者の自己肯定感の向上が確認できた。参加者の過半数がもとも瀬戸市のサークルで練習を続けており、修了後は長久手市在住の初心者メンバー2名も加わるなど、地域における趣味活動の展開につながっている。今後は彼らのやる気をさらに活かす場を作っていくことが求められる。

高齢者の場合、自分の特技を活かし、他者を助けることができれば、自己肯定感が高まっていく。次のカフェ開催時には彼らが担い手として、また企画・広報の協力者として活動に加わっていただけるよう、関係を保ち続けていきたい。

### ②初クラ講座

この企画は参加者の層、つまり、今まで市役所や文化の家が行う企画にはあまり参加しなかった人をどれくらい呼び込めたかが一つのポイントであった。実際は過去、文化の家の企画に参加した経験を有する者が大半を占めており、今後は新たにクラシック音楽に関心を持つ“新規層”をより増やしていきたい。そのためにも広報に力を入れ、狙った層の参加者が少しでも増えるような工夫が必要である。加えて参加者の達成感、自己肯定感の高まりをより促進するためにどのような運営上の工夫ができるかが課題となる。

### ③ふくしであーと

この活動は通常の音楽活動に比べ、より高い専門性の発揮と綿密な企画の遂行、臨機応変な対応が求められる。運営の点から言えば、毎回の実践に対し、企画意図に沿ったものであったのか、芸術文化の「活用」の視点からどうだったか、福祉の視点からはどう評価できるか、アーティストの成長の点からはどうかなどについて、適宜、振り返りを行うことができなかった。アーティストやスタッフはそれぞれ現場でいろいろなことを感じている。それらの気づきをシェアしあい、よりよい活動へとつなげていくことが求められる。そのためにも一つの活動が終了したら短い時間であってもふりかえりを行い、次に活かしていくという活動を模索していきたい。

### ④依頼演奏 in 医療福祉領域

行政連携の一環として行う活動であるため、依頼先の意図を酌んだ企画の実施が第一優先となる。この活動においては、依頼先の要望をよく把握するとともに、ふくしであーととのバランスを考えた活動を行っていきたい。

### 3. 2020年度当初に立案した福祉事業

2020年度の活動内容とスケジュールについてまとめたものが下記のとおりである。ここでは2019年から2020年度にかけ、振り返りをもとに変更を加えた点について述べる。

#### ①サクスカフェ

修了生の活躍の場の確保とやりがいの向上を意図し、2019年度の修了者を企画メンバーに入れる。これまで講師が担っていた全体の運営や個別指導を一部、修了者にお願いする。

#### ②初クラ講座

参加者層を広げるため、開催地を文化の家に限らないこととする。コアなファン層を組織化し、遠足や逃した講座のビデオ視聴などの特典を付ける。毎回の受付は行わない（参加者数が不安なら、初回だけ受付を設ける）。開場は30分前に行う。

#### ③依頼演奏 in 医療福祉領域

若手演奏家の育成の場としての位置づけを加える。依頼先との打ち合わせには演奏者も入る。演奏者が先方のイメージを確認、そのイメージをもとに演奏を工夫、終わったら依頼者に対して満足度を中心としたアンケートを取る。

#### ④ふくしであーと

実施先の状況に応じ、めざす目標を2つに分ける。一つは愛知たいようの杜、百千鳥、あいち小児保健医療総合センターを想定した「社会的包摂の視点に基づく質の高い音楽を提供」、もう一つは夢の家、南生協病院、(株)ほほえみを想定した「福祉領域の課題解決に音楽を活用」とする。年度末には訪問を重ねたアーティストのコンサートを企画し、施設の入所者や職員がお気に入りのアーティストを応援し、音楽を楽しむためにホールに足を運ぶことができるようにする。運営上の工夫について、実施にあたっては、4か月前には施設に協力依頼&実施日確定、3か月前には編曲依頼（適宜）、1か月前には担当者と打ち合わせ、本番、という流れを取る。

加えて、事業全体の進捗状況管理と実施後の総括のために月1回、文化の家スタッフ、フランチイズアーティスト、福祉専門の助言者とで定例会議を持つことにした。

## 第2章 2020年度 福祉事業の実際

2020年度は先述した事業案のうち③依頼演奏 in 医療福祉領域 と④ふくしであーとの2つを行った。①サクスカフェと②初クラ講座については、新型コロナウイルス感染防止の観点から実施することがかなわなかった。ここでは2020年度に行った依頼演奏 in 医療福祉領域、次にふくしであーとの活動について振り返りを行う。

### 1. 依頼演奏 in 医療福祉領域

2020年度は長久手市社会福祉協議会が行うサロンの一つとして、元福井医院の屋外駐車場で演奏する「青空コンサート」を3回実施した。演奏は音楽系創造スタッフの3名（フルート：細川杏子、パーカッション：弓立翔哉、ピアノ：了徳寺佳祐）が担当した。

2020年度依頼演奏 in 医療福祉領域 実施一覧							
No.	日にち	場所	対象	参加者数	演奏	内容	同行スタッフ
1	6/3	元福井医院 駐車場	一般市民	30	創造スタッフ ・細川杏子 ・弓立翔哉 ・了徳寺佳祐	青空コンサート＋長久手ハーモニー体操	齋藤、黒野
2	7/29	元福井医院 駐車場	一般市民	30	創造スタッフ ・細川杏子 ・弓立翔哉 ・了徳寺佳祐	青空コンサート＋長久手ハーモニー体操	齋藤、水野
3	9/30	元福井医院 駐車場	一般市民	30	創造スタッフ ・弓立翔哉 ・了徳寺佳祐	青空コンサート＋長久手ハーモニー体操	齋藤、黒野



このサロンは高齢者の日常的なつながりの場となっており、株式会社長久手温泉のスタッフによる健康体操を実施したのち、音楽演奏を楽しんでいただくという内容である。サロン企画者としては、青空コンサートを行うことにより、健康体操にさほど関心がなかった人でもサロンに参加してくれるのではないかと、そこから新たなつながりを作ることができるのではないかと意図がある。一方、文化の家としては、高齢者の社会参加促進の一環として、ここでの交流を通じ、今までホールに足を運んだことのない人が文化の家の存在を知り、アーティストに関心を持つことで文化の家が行う企画に足を運んでいただけるようになることを意図していた。

実施した結果、参加者からは「間近でアーティストの演奏が聴けて良かった」という感想を得ることができた。また、創造スタッフたちも会場の下見を行い、主催者と打ち合わせ、サロンの参加者に合わせた選曲をするなど、企画立案のプロセスを経験し、成功に向けた工夫について考えることができた。

今後の課題としては、実施先の検討と文化の家としての関わり方の2点が挙げられる。実施先の検討は、今年度、実施先が1か所にとどまった点である。文化の家が長久手市の行政機関の一つであるという位置づけを考えれば、なぜ1か所のみなのか、他に演奏を実施できる可能性はなかったのかという疑問が生じる。

2020年度はコロナ禍により、社会福祉協議会が行うサロンそのものが開催されなくなってしまった。そのなかで、今回実施したサロンは元病院の駐車場で行うため、文化の家がアーティストを派遣する条件を満たし、新型コロナウイルス感染予防に配慮したコンサートを行うことが可能な唯一の場所であった。今年度は1か所のみにとどまったが、次年度は改めて、市内の他のサロンに参加する可能性を探っていきたい。

このサロンの目的は、そもそも家にこもりがちな高齢者が外出する機会を作る、というものであった。しかし現実には、サロンに集う人たちはほぼ毎回、固定化しており、新規のメンバーが大勢参加するというわけではなかった。サロンに集う人たちは既に人とのつながりを有しており、社会資源ともつながっている。これは文化の家というよりも社会福祉協議会が直面している課題ではあるが、本来、サロンに来てほしい、家にこもりがちな高齢者が外出するきっかけを創り出すにはもう一工夫する必要があると思われる。そのうえで文化の家がどのような役割を果たせるのかについて、社会福祉協議会の担当者とともに検討していくことが求められる。

## 2. ふくしであーと

2020年度に訪問することができたのは春日井市の夢の家（障害者施設）、長久手市の愛知たいようの杜（高齢者施設）の2か所のみであった。南生協病院については実施日を決めたが、愛知県内に緊急事態宣言が出たため中止になってしまった。他にこれまでつながりのあ

った施設については、新型コロナウイルス感染拡大の状況を見極めつつ、今後の関わり方について考えていく。

## 1) 夢の家

2019年度は2回訪問し、2020年度も家族会開催に合わせ、7月に訪問が予定されていたが、状況的に難しくなったため、文化の家からビデオレター作成の提案を行った。6月にアーティスト2名（石川、倉橋）の挨拶と演奏を収録したDVD、10月に利用者やご家族からのリクエスト曲とNG集を収録したDVDを郵送した。10月に送付したDVDは10月に行われた施設内座談会の場で上映され、利用者及び職員の皆様に楽しんでいただいた。

後日、施設の担当者からのメールには、「当日、リクエストした人を中心に何度か繰り返し鑑賞させていただきました。いつでも再生できるように食堂にDVDデッキを配置し、あれから何十回と再生をされております」という言葉と、利用者の皆様が喜んでいたり、精神面の安定につながったこと、再度の訪問を望んでいることが記されていた。

生演奏ではなく映像鑑賞になったことについては「コロナで暗いニュースが多い中、作成していただいたDVDは好きな時にいつでも鑑賞できるのでプラスに考えてコロナ過の宝物として大切にいたします」という受け止めがなされていた。ビデオレターを届けたことの反応として「当方まだまだ、外出泊禁止、面会制限を行っており持ち込まないように職員は必死になっており、皆様方の優しい気持ち、プレゼントが大変励みになりました」との言葉をいただいた。

このメールの内容からは、入所者および職員にとっても喜んでいただいたことが推測できる。2021年度以降も、施設を直接訪問できるようになるかどうかは定かではない。現時点では、感染拡大のリスクを最大限抑え、かつ、個人に対して演奏する「あなただけのリクエスト」に応じるためには、ビデオレターの方法を取ることが効果的なものかもしれない。ただこの方法はかなり時間と労力がかかるため、2018年から2019年にかけて力を入れてきた「あなただけのリクエスト」をどのように発展させていくのかについては、引き続き検討していきたい。

### 挨拶と演奏のビデオレター（DVD）（6月送付）



リクエスト曲演奏とNG集を収録したビデオレター（DVD）（10月送付）



## 2) 愛知たいようの杜（長久手市 高齢者施設）

2019年度は2回の訪問であったが、2020年度は法人内の各施設においてバルコニーコンサート（屋外演奏）を8回行った。訪問した施設は特別養護老人ホーム（ハモリー館、杜つと館）、多世代共同住宅（ぼちぼち長屋）、小規模特別養護老人ホーム（だいたい村）、グループホーム（喜楽家）、ケアハウス（ケアハウスゴジカラ村）である。演奏は中庭や玄関通路、テラス前などで行い、入所者には屋外や施設の軒先、あるいは施設のなかから窓越しに耳を傾けてもらう形をとった。

準備にあたっては施設の負担を軽くすることを念頭に置き、到着時に声がけし、電源を借りた後はできる限り施設職員の手を煩わせないよう心掛けた。演奏は毎回、文化の家フランチアイズアーティストである石川貴憲（サクソフォン）と、即興演奏等臨機応変な対応が可能なピアノ奏者の2名体制で実施した。3/26の回のみ、創造スタッフの弓立翔哉（パーカッション）が共演した。

2020年度ふくしであーと 実施一覧							
No.	日にち	場所	対象	参加者数	出演	内容	同行スタッフ
1	6/21	愛知たいようの杜 だ いたたい村	高齢者	15 ～ 20 人 程度	石川貴憲 菅原拓馬	バルコニー コンサート	生田、黒 野、湯原
2	6/27	愛知たいようの杜 ぼ ちぼち長屋	高齢者	30 人 程度	石川貴憲 丸尾祐嗣	バルコニー コンサート	黒野、齋 藤
3	7/3	愛知たいようの杜 ケ アハウスゴジカラ村	高齢者	20 人 程度	石川貴憲 丸尾祐嗣	バルコニー コンサート	生田、齋 藤、黒野
4	9/26	愛知たいようの杜 杜っと館 ハモリー館 だいたたい村 喜楽家	高齢者	20 ～ 30 人 程度	石川貴憲 丸尾祐嗣	バルコニー コンサート	生田、黒 野、齋藤
5	10/22	愛知たいようの杜 杜っと館 ハモリー館 だいたたい村 喜楽家	高齢者	20 ～ 30 人 程度	石川貴憲 菅原拓馬	バルコニー コンサート	齋藤、黒 野、山本
6	10/25	愛知たいようの杜 ケアハウスゴジカラ村	高齢者	20 名 程度	石川貴憲 丸尾祐嗣	バルコニー コンサート	生田、黒 野
7	11/12	愛知たいようの杜 杜っと館 ハモリー館	高齢者	30 人 程度	石川貴憲 菅原拓馬	バルコニー コンサート	生田、黒 野、下谷
8	2021 年 3/26	愛知たいようの杜 杜っと館 ハモリー館	高齢者	30 人 程度	石川貴憲 菅原拓馬 弓立翔哉	バルコニー コンサート	生田、黒 野、湯原

・ハモリー館・杜っと館 演奏の様子



ハモリー館・杜っと館は中庭を取り囲むように施設の建物が配置されており、ちょうど、どの建物からも演奏者が見える位置で演奏をすることができた。

左写真の奥に見えている連絡通路には車椅子が並び、演奏会を楽しむ入所者が見える。各部屋のベランダから楽しむ入所者も多かった。



左写真は、南側の建物の様子。各窓からは入所者が顔を出しているのが見える。演奏終了後には演奏者に大きな声で、感謝を呼びかける入所者も複数人いた。



・ぼちぼち長屋 演奏の様子

ぼちぼち長屋は、入所施設とデイサービス施設が併設されており、両方の利用者が演奏を楽しんだ。比較的 ADL の高いデイサービス利用者は軒先に椅子を出して座り、演奏者との距離を保ちながら演奏を楽しむことができた。



・だいたい村 玄関前 演奏の様子



入所施設のだいたい村では、玄関前の通路を利用して演奏を行った。建物の構造上、演奏者側からは、なかなか入所者の顔を見ることができなかったが、ときおり建物内から声援や、いっしょに歌う声が聞こえてきた。

・だいたい村 嬉楽屋 演奏の様子

だいたい村の敷地内にある、嬉楽屋での演奏は、縁側（バルコニー）を使用してコンサートのような形式で行った。



・ケアハウス ゴジカラ村 演奏の様子



ケアハウス ゴジカラ村は建物の方向へ向けてスピーカーを使用して音を拡散させるようにセッティングを行った。

入所者は各自の部屋や、軒先で演奏を楽しんだ。写真のように演奏者とは十分な距離をとっての演奏を行った。

・演奏会前の準備の様子



機材準備等は文化の家のスタッフがアーティストより前に現場に入って行った。

アーティストが現地に入ったあとはアーティストの音出しの調整、マイクの調整、音のバランスの調整などを行い、開演に備えた。左写真ではアーティストの楽器の音色を集音しやすいようにスタッフがマイクを調整している。

(1) 活動の成果と意義

活動にあたっては2回目（6月27日）以降、文化の家担当スタッフが毎回、その場での気付きを示した記録をA4サイズで1枚作成していた。ここではその記録を分析し、屋外でのふくしである活動を円滑に行うための配慮事項や工夫、参加者にどのような成果が得られたのかを調べる。

分析方法は質的記述的な分析である。記録に記された文章を一文ずつに分け、内容に応じてカテゴリを付与していった。その結果、3個の大カテゴリ（場の設定、運営の工夫、変化）、7個の小カテゴリ（環境づくり、職員サポート、アーティスト工夫、職員工夫、スタッフ工夫、利用者変化、職員変化）が生成された。以下、各カテゴリの詳しい内容を示す。

・場の設定

この項目には「環境づくり」と「職員サポート」が含まれる。

「環境づくり」については、アーティストへの配慮として直射日光を避ける、軒下など日陰

で演奏できるようにする、雨や湿度の楽器への影響を考える、アーティストが演奏中または演奏後に休むことができる場を確保しておくことが示された。演奏場所については施設に出入りする人たちの妨げにならない場所を選び、なるべくアーティストから利用者の姿が見えるよう努めていた。入所者に対しては、気温、風、日光のあたり具合を確認し、暑かったり寒かったりすることがないように気を配っていた。

活動を行うにあたっては施設職員の手を煩わせないことを基本としていたが、実際は職員の方々から様々なサポートをいただいた。開始までに誘導アナウンスを行い利用者が余裕をもって移動できるようにする、車いすなど移動に困難を抱える人たちについては音がよく聞こえ、かつ、演奏者が見える場所に誘導するなどがなされていた。

#### ・運営の工夫

この項目には「アーティスト工夫」、「職員工夫」、「スタッフ工夫」が含まれる。

「アーティスト工夫」について、利用者からのリクエストに即対応する、準備中に利用者が好みそうな曲が分かれば積極的に取り入れる、評判がよい曲はサビの部分を繰り返し演奏する、子どもが参加しているときは子どもが喜びそうな曲（例：名探偵コナン、となりのトトロ、アンパンマンマーチ）を演奏する、声援に対しては手を振って応えるなどが確認できた。また、高齢者によく知られている歌（例：美空ひばり 川の流れるように）や皆が歌える唱歌（例：月の砂漠、夕焼け小焼け）、職員にも好まれる歌（例：中島みゆき 糸）などが選曲されていた。

「職員工夫」について、開始前に会場の雰囲気盛り上げておく、演奏会が始まる形を決めておく、ロールカーテンをパッと上げて開始の合図にする、ペットボトルの手作りマラカスなど楽しめる小物を用意する、曲に合わせて踊るなどが確認できた。

「スタッフ工夫」は、聴いている利用者全員に音が届くよう高性能スピーカー（なければ普通のアンプ）を用意する、窓を開けて外に出ようとするなど気になる利用者を見つけたら職員に知らせることが示されていた。

#### ・変化

この項目には「利用者変化」と「職員変化」が含まれる。

「利用者変化」は、バルコニーに顔を出す、外に出てくる、席取りをする、曲に合わせて手拍子をする、首をゆらす、一緒に歌う、踊りだすなどの自発的行為の出現に加え、アーティストらに手を振る、アンコールを求める、「ありがとう！」「また来てね！」など声掛けする、次回に向けてリクエストをするなど他者（アーティスト）に働きかける行為が見られるようになった。ここでは利用者の変化のうち、注目すべきエピソードを2つ紹介する。

#### エピソード①

演奏終了後、職員に付き添われて、ひとりの男性がわざわざ外に出てきてアーティスト達

に、「ほんの気持ちだからとっておいて」と言ってポケットからお札を出し、渡してくれた。よく見ると「玩具銀行」と表記された、よくできた偽物の一万円札だった。本人はいたって真剣で、どうやら本当のお金と信じ、アーティスト達に渡したよう。演奏のお礼を述べたい気持ちがよく伝わってきた。アーティストたちが「チップありがとうございます」といって受け取ると、彼は満足げな顔で施設内に戻った。施設内に戻ってからも、こちらの片付けやテラスでお茶をいただく様子を窓から眺めていた。

## エピソード②

ノリのいい女性が、アーティスト達に「タカちゃん」「ユウちゃん」とあだ名をつけ、大きな声で呼んでくれていた。この女性は演奏の最後にも、「コロナでつまんなかった気持ちが演奏を聴いてふっとんだ！ありがとうね！また来てね！ぜったいだよ！」と言ってくれた。この女性はムードメーカー的な存在で、その場の雰囲気明るくするのが得意なよう。アンコールの「上を向いて歩こう」では、半身が動きにくいのに、立ち上がって踊りはじめた。つられてまわりにも体をゆらし踊り出す利用者が何人かいた。

「職員変化」では、勤務場所が異なるのにわざわざ見に来てくれる、スタッフにぜひまたやってほしいと伝える、インスタグラムにあげたいと言う、演奏後、アーティストにお茶とお菓子を出してくれるなどが確認できた。

## (2) 成果に対する考察

2020年度にふくしであーとの活動として、入所者の前で演奏を行うことができたのは一人のみであったが、コロナ禍における音楽活動の可能性を見出すという点においては、今後につながる重要な知見を得ることができたのではないだろうか。

場の設定や運営の工夫については、今後、他の医療福祉の現場で同様な音楽活動を行う際に参考となる内容であろう。たとえば屋外演奏であっても、聴き手の姿を確認することができるかどうかは、演奏する側から見れば重要なポイントである。また聴き手の立場に立てば、車いすや寝たきりなどで移動に困難があったとしても、音がよく聞こえ、かつ、アーティストが見える場所に行きたいと願うだろう。企画側としてどのような準備や配慮を行ったらよいのか、施設職員に何を伝えておく必要があるのか、施設職員に負担をかけないことはもちろんであるが、事前に確認しておくことよい事項について具体的に知ることができた点は大きな成果である。

利用者および職員の変化については、医療福祉の現場における音楽活動の意義と効果を示すものであり、特に重要な知見と考えられる。利用者については、演奏に合わせ一緒に歌うなどの自発的行為の出現に加え、次回に向け希望の曲をリクエストをするなど、アーティストに自ら働きかける姿が見られた。これは注目すべき効果である。福祉施設においては常日頃、利用者の意欲を高めるために日々、職員が努力を重ねているが、なかなかよい反応を

得られず苦心していることも少なくない。しかし音楽の力により、利用者に多様な反応が見られ、なかには他者に働きかける行為に及ぶほどに、行動の変容が見られたのだ。目の前のアーティストを応援し「また来てね！」などと声をかける行動は、一人の人として、他者を支援する行為である。ふくしであーとの場では、いつも気遣われ、助けられる存在の利用者が音楽活動に参加することにより、他者を気遣い、支援をする側に回るができる。このような立場の変化は自己肯定感の向上につながり、生活の彩となり、いきがいの創出につながっていくことが想定される。エピソード①では、入所者である男性は感謝の気持ちを直接アーティストらに伝えるため「玩具のチップを渡す」という行動に出た。これは彼にとっての精一杯の感謝と応援のあらわれである。そこにアーティストが機転をきかせ感謝を述べたことで、男性は満足して施設内に戻っていった。エピソード②では、入所者の女性は顔見知りとなったアーティストたちに直接、応援する言葉をかけている。生き生きとした、楽しいコミュニケーションが目につく。憧れの人でも、好きなアーティストでも、「押し」の存在がいることは、その人の人生を豊かにする。孫のようなアーティストらが入所者らの「押し」となり、彼らが次回の訪問を楽しみにするようになれば、日々の生活がより豊かになっていく効果が期待できる。

職員については、企画側が驚くほどに活動への協力と感謝をいただくことができた。福祉の現場では、施設から感染者がでないよう、職員は常に細心の注意を払っている。今まで幅広く受け入れていた施設外の人々も感染防止のため受け入れることができず、すべての業務を職員が担わざるを得ない。消毒などの感染防止対策が新たに加わり、閉塞した、気を抜けない状況が長期間続いている。いくら志が高い職員であっても、疲れた心身をリフレッシュし、明日への意欲を取り戻す時間は必要だろう。今回の演奏では、入所者ととも歌い、拍手をしたり、わざわざバルコニーまで出て来て手を振ってくれたりする職員が複数見られた。アーティストらによる生演奏は利用者のみならず、職員にとっても癒しの機会となったことが推測される。

訪問を重ねるにつれ、文化の家スタッフと施設職員との間に信頼関係が生まれ、施設によっては活動に対する意見交換ができるようになった。その流れで浮上したのが、昨年度末から検討してきた「お気に入りのアーティストのコンサートに“出かける”」企画である。入所者の生活を豊かにしたいという共通の価値観のもと、文化の家スタッフが施設職員とともに企画を練っている段階であり、短い期間にここまで関係を深めることができたのは、担当者の熱意の賜物であり、常日頃、文化の家スタッフが施設職員らと丁寧なコミュニケーションを重ねてきた成果と言えよう。「お気に入りのアーティストのコンサートに“出かける”」という行動は、入所者の立場から考えれば、日々の暮らしのなかに「予定」ができる、楽しみができる、他の入居者と共通の話題を持てる、外出して非日常を味わうことができるということを意味する。感染防止対策の徹底や移動手手段の確保など、この先、克服しなければならない課題は山積しているが、企画の実現に向けた可能性を追求するプロセスそのものに

大きな意義があることを念頭に置き、無理のない範囲で可能性を探っていきたい。

次に、2019年度の報告書にて示された4つの課題（対象施設との関係づくり、マネジメントの充実、フランチャイズアーティストの成長の場としての工夫、スーパービジョンの導入）について、2020年度にどのような前進が見られたのかを確認していく。

### (3) 2019年度から引き継いだ課題

#### ・対象施設との関係づくり

2019年度が終了した段階では、ふくしであーと対象施設への働きかけは一部のみしか行えておらず、連絡交渉も統一されておらず、文化の家と施設担当者との間に強い信頼関係が築かれているとは言い難い状況にあった。しかし2020年度に入り、愛知たいようの杜については担当者の地道な努力の成果の甲斐あって、回を重ねるごとに関係を深めることができた。愛知たいようの杜は長久手市の法人であり、重点的に働きかけたいと考えていた対象の一つであったことを考えると、この1年の変化は大きな成果と言える。次に、従来からよい関係を築くことができていた夢の家についても、届けたビデオレターが好評で、入所者や職員の皆様から喜びの声をいただくことができた。その他、南生協病院においても引き続き音楽活動への理解を示してくださっており、新型コロナウイルス感染が落ち着き、ボランティアの訪問が可能になったら再び活動を行える状況にある。

2020年度当初、ふくしであーとについては訪問可能な施設を2つの目的ごとに分け、それぞれの状況に合わせた活動を展開していこうと考えていた。だがコロナ禍により、求められる活動も大きく変わりつつある。今後は何を目的に、どこに、どのような活動を展開していくのかを検討し、ビジョンの実現に向けた活動を行っていくことが重要である。

#### ・マネジメントの充実

2019年度報告書では、日程管理やピアノ奏者の確保、ピアノ奏者への達成目標の説明、先方との連絡調整などのマネジメントについて、今後は文化の家担当者が全体を俯瞰して一括して管理する形を取り、信頼関係を築いていくこと、実施後には関わった者が集まり、振り返りを行うというサイクルを構築していくことの2点を提起した。2020年度に入り、これらはともに達成され、施設との信頼関係の構築と活動内容の充実の両面から改善を図ることができた。

ただし、実施にあたり4か月前には施設に協力依頼&実施日確定、3か月前には編曲依頼（適宜）、1か月前には担当者と打ち合わせ、本番、というプロセスを踏むことはできなかった。昨年度、この提案を行った主旨は、アーティストが納得いくまで演奏の質を高めることができるよう、余裕ある日程で実施を進めていくことにあった。しかし今年度、ある回においては、演奏メンバーが確定したのは演奏日の直前であり、かつ演奏箇所が1か所から2か所に増えたため、アーティストらは合わせの日程調整ができず、事前に集まって準備する

ことも叶わず、当日の朝、1時間で何とか間に合わせるという事態に陥ったことがあった。特に演奏に支障は出なかったが、このような事態になるとアーティストらに大きな負荷がかかってしまう。アーティストらが演奏にあたり、十分な準備ができるよう、スタッフのマネジメント力向上を図ることは喫緊の課題である。

#### ・フランチャイズアーティストの成長の場としての工夫

2019年度報告書では、フランチャイズアーティストが一つひとつの企画にじっくり向き合うことができるよう適切な実施回数に調整すること、内容面で工夫ができる形を作っていくことを提起した。

実施回数について言えば、2020年度の訪問は8回に留まり、フランチャイズアーティストの力量から考えれば少ない回数であった。コロナ禍がどこまで続くのか予測がつかない状況ではあるが、フランチャイズアーティストが一つひとつの活動に丁寧に向き合えるよう配慮しつつ、活動の場の開拓を行っていききたい。内容面での工夫については、夢の家のビデオレター作成において、リクエスト曲を編曲し演奏するという試みを行うことができた。また、愛知たいようの杜ではその場の状況に応じ、即興演奏を組み入れることにもチャレンジできた。一方、演奏以外の要素も視野に入れ、聴覚のみに頼らない企画に挑戦していくという案は次年度以降に繰り越しとなった。施設利用者がみな、音楽好きとは限らない。なかには演劇やダンスなどに興味がある者もいるだろう。今後は音楽と他の芸術とのコラボレーション企画など、文化の家の総合力を発揮できる、文化の家だからこそ可能な企画の立案を行っていききたい。

なお、フランチャイズアーティストの制度は、創造スタッフの次のキャリアアップの場としての意味合いで昨年、初めて設けられたものである。制度として確立されたものにしていくために、創造スタッフの期間に数多くの演奏経験を積んだアーティストがこの先、地域でどう活躍していくのか、フランチャイズアーティストだからこそ担える役割は何なのかを考え、キャリアアップの方向と内容の充実をめざしていききたい。たとえばふくしであーとの活動に参加するアーティストにアドバイスを行うなど、フランチャイズアーティストの知識と経験を活かせる場を作っていくことが課題となる。

#### ・スーパービジョンの導入

2019年度報告書では、ふくしであーとを行う施設に対しては、福祉に詳しい者が同席し、福祉の価値観からすればそこで何が起こっていたのかを確認、実施後に文化の家スタッフやアーティストに解説をしていくという流れを作っていききたいという提案がなされた。

2020年度は担当者が変わり、大学で社会福祉を学び、ソーシャルワーカーとして働いた経験を有する者がふくしであーとを担うことになった。また、月1回の打ち合わせ会議を開催することになり、担当者の気づきをもとに、企画メンバーが活動の振り返りを行うことができるようになった。そこに福祉系大学の教員によるスーパービジョンが入り、福祉の視

点から見て重要な指摘を行うことができる体制が整った。

### 第3章 事業担当者の諸感

本章では福祉事業を担当した文化の家スタッフ、福祉事業アーティストが事業を行って  
いくうえで感じたことについて紹介していきたい。

#### 1) 福祉事業アーティスト (石川貴憲)

私は29歳のサクソフォン奏者で、西洋のクラシック音楽を専門にしてきました。文化の家の創造スタッフを経て、フランチャイズアーティストとして福祉事業に携わるようになり、およそ2年が経過しました。

この事業は、自分とは異なる世代や立場の方の背景を知ることで、自らの表現を向上させる沢山のヒントが得られる場だと感じています。

福祉事業の演奏会では、私たちとは世代や育った環境が異なる方に向けて演奏することが多くありました。

高齢者施設では、利用者の皆さんは童謡や唱歌の懐かしさを感じたり、また演歌やその世代のポップスに彩られた青春を思い出したりしていました。演目の持つ「ノスタルジー」が楽しい時間を作る一つの要素だと感じます。

また障害者施設の若い世代の方からは、最新のアニメソングなど流行歌の演奏をリクエストいただくこともありました。

そのため普段のクラシック音楽の演奏とは異なる心持ちとなりますが、福祉事業にハートのある「アーティスト」として関わるには、聴いて下さる方々の背景に興味を持ち、それぞれの世代が親しんできた歌謡曲、ポピュラー音楽の文化を自らの持つ専門分野と関連させて学び、クラシック音楽以外の演目を頼まれて演奏するという意識から表現の一環として楽しむ姿勢を作ることが必須だということを感じることが多くなりました。

クラシカルサクソフォンの世界は世俗的な文化と深く関わりながら発展してきたものなので、歌謡曲の表現が直接的なヒントになることもあり、自分にとって新しい音色を探せることが刺激になっています。

#### ※後進へのアドバイス

クラシック音楽を学ぶ文脈から離れたように感じるポピュラー音楽にも積極的に関わって、時間をかけて自分なりの形を作れるといいと思います。相手の世代についての知識があ

ると利用者の方との会話もはずみますし、演奏会のMCにおいても自然体になれると思います。

私もまだ模索中ですが、自分の最も魅力を感じている専門分野と福祉分野での特性が結びつき、聴いてくださる方に歓迎された際には、大きな喜びを感じられると思います。

## 2) 文化の家担当スタッフ（劇場職員の視点から：黒野雅直）

平成29年に改正された文化芸術基本法は、「社会包摂」というキーワードのもと、劇場が芸術文化を活用し、社会課題の解決に向けて取り組むことを施策のひとつとして示している。しかしながら、現在の日本において、社会包摂を主題に据えた事業を展開している劇場は、まだ少ない。

この原因を察するに、予算措置がない、スタッフが少ない、専門的な視点をもつ職員がいない、など多々あるだろうが、大きな理由として、劇場側が「いったい何をすればいいのか」という疑問を抱えたまま時間が過ぎているのだと思われる。幸いにも文化の家では早い段階で、よい巡り合わせを得て、日本福祉大学の湯原悦子先生（長久手市在住）にご協力をいただき、芸術文化を活用した福祉事業の実施をしていくことができた。またサクソ奏者の石川貴憲さんがフランチャイズアーティストとして、この事業に関わっていることも、非常に大きな原動力となった。

しかしこの1年、新型コロナウイルスの脅威が世界を席卷し、劇場は多くの制限を余儀なくされ途方に暮れることとなった。経験したことのない事態の中で、福祉事業についても、これまでの訪問演奏や芸術講座ができなくなり、なにをしていくかを模索した。ちょうど4月～5月ごろ、海外で屋外バルコニーコンサートについてのニュースが取り上げられており、これを参考にして福祉施設での事業を展開してみることにした。このバルコニーコンサートがもたらした成果については本報告書を参考にさせていただきたい。（報告書8ページ～参照）

コロナ禍におけるバルコニーコンサートは、たしかな手応えを感じるものであった。しかし反省点も多くあった。これまで経験したことのない状況下で、準備・初動が遅れ、実際に行えたのは緊急事態宣言が解除された翌月の6月であった。バルコニーコンサート実施回数は8回にとどまり、もう少し実施回数を増やすことができるとよかった。

本来であれば、さらに多種多様な福祉の課題に文化芸術によるアプローチを行うことが理想であるが、福祉分野は幅広く、すべてにアプローチを行うことは難しい。とすると劇場としての福祉事業は、特定のニーズに対し、具体的な目的と目標をしっかりと設定し、進めていくことが必要となる。コロナ禍の今回であれば、その方法はバルコニーコンサートであったわけだが、私たち劇場職員には目標設定が足りていなかったかもしれない。先の見えない中で策を講じながら事業をすすめて、とにかく今できることをやろうと、明確なビジョンを持ちきれないままにスタートしてしまった。これは来年度、もう一度見つめ直したい部分

である。

文化の家の劇場公演も、6月から感染症対策をしながら再開した。仕事に戻ってきた中で、業務の主軸となる劇場公演と、福祉事業とのバランスも今後の課題と感じた。福祉事業の回数を増やしたり、内容を濃いものにしたりしていけば、それだけ劇場やアーティストの負担が大きくなるが、主軸の劇場公演も同時に進行していかなければならない。劇場という場が、福祉に特化した機関ではない限り、このバランスの課題は今後、各地方の劇場が社会包摂事業に取り組みはじめた際に必ず直面するものであろう。

文化の家も「できることではなく、やらなければならないことは何か」を考えることが大切であると、日頃湯原先生からもアドバイスをいただいているが、現状は他業務と並行して「できること」の範囲でアプローチしているのが正直なところであると思う。

しかし、コロナ禍での福祉事業を行う中で、その必要性和重要性も肌で感じる事ができた。福祉施設の担当職員の方と、バルコニーコンサートの打ち合わせ等でお話をしている中で、入所者のみなさんにコロナ禍でもなんとか施設での暮らしに活力を持ってほしいと奮闘されている姿を知ることができた。そして、そのためにできることを必死で探していることを知り、劇場として、文化芸術を通して、なんとかそれを応援することができないかと、私たちが改めて強く考えるきっかけとなった。現在、コロナ禍における施設入所者の外出機会の提供のため「劇場招待コンサート」を施設職員と相談しながら計画している。感染症対策を徹底した劇場で、入所者にコンサートを楽しんでもらう企画である。近いうちになんとか実現したいと思っており、これは私たちにとって「やらなければならないこと」になりつつある。

文化の家の福祉事業は、現在は未熟なものかもしれない。しかし一朝一夕で実現できるものではなく、この取り組みを継続し、模索し続けることで、劇場が行う福祉分野への取り組みのモデルケースになればと思っている。公共文化施設全体が社会包摂に目を向け、意識変化が生まれるきっかけとなり、いつか全国でこうした社会包摂事業が劇場業務のひとつとしてごく自然に取り組みされるようになることを願い、今後も続けていきたい。

## 第4章 2020年度 福祉事業のプログラム評価

本章では2020年度の福祉事業について、プログラム評価の観点から効果検証を試みたい。

社会的介入プログラム実施後の効果検証という視点から評価を行うことにより、実施したプログラム（依頼演奏 in 医療・福祉領域、ふくしであと）の意義や有用性、今後の課題を確認し、さらなる改善を目指していく。

評価項目は以下の①～⑤の通りである。

①事業に対するニーズ（ニーズアセスメント）

- ②事業の設計（事業のゴールと目標を明確かつ具体的に記述。事業がその問題の改善に向けて妥当な計画を立てているかどうか）
- ③事業の実施およびサービス提供（a.意図した目標に沿って、適切な対象に対し、確実に実行されているかどうか b.必要な人材や資源を組織化し、最大活用できているかどうか）
- ④事業のアウトカム（インパクトアセスメント。事業によって変化がもたらされることが期待される標的集団や社会状況を測定し、事業がどの程度、どのような改善をもたらしたのか）
- ⑤事業の効率性（効率性分析…事業の費用とアウトカムとの関係を説明。費用効果分析では、類似の目的を有する事業をその相対的な効率性の観点から比較）

## 1. 依頼演奏 in 医療福祉領域

### ① プログラムに対するニーズ（ニーズアセスメント）

家にこもりがちな高齢者の外出の機会を作るなど、社会福祉協議会が行うサロンそのもののニーズはコロナ禍でむしろ高まっている。現在、人々が芸術・文化に触れる機会は少なくなり、外出自粛によるストレスの高まりを考えると、プログラムに対するニーズは極めて高いと考えられる。

### ② プログラムの設計

企画者である社会福祉協議会の担当者と連携し、サロン参加者のニーズを踏まえた選曲をすることができた。

### ③ プログラムの実施およびサービス提供（a.意図した目標に沿って、適切な対象に対し、確実に実行されているかどうか b.必要な人材や資源を組織化し、最大活用できているかどうか）

a.意図した目標に沿って、適切な対象に対し、確実に実行されているかどうかについて、社会福祉協議会の担当者と目標や対象を共有することができた。活動を行った対象は1か所にとどまったが、プログラム自体は大変好評で、参加者から「ありがとう」「また来てほしい」などの言葉をいただくことができた。ここからは主催者の意図に沿った企画を確実に実行できたと考えられる。行政連携の観点では、社会福祉協議会の担当者から「今後、車の展示場で企画を行う可能性があるので一緒にどうか」という話をいただいたことがあった。社会福祉協議会が行う企画の幅を広げる一つの方法として、文化の家の活動を捉えていることが推測できる。

b.必要な人材や資源を組織化し、最大活用できているかどうか については、当時、活躍の機会が減っていた創造スタッフにとって貴重な音楽活動の場となり、文化の家としての有意義な機会を創造することができた。

※創造スタッフコメント（弓立翔哉（パーカッション）・細川杏子（フルート）より）

プログラムについて、「親しみやすさ」をテーマにコロナ期間外へ出ることのできなかった高齢の方々に馴染み深そうな鍵盤ハーモニカの音色を選択した。また、フルートと昭和歌謡は相性がいいので、それもプログラムに組み込んだ。

ピアノと打楽器の編成の時は、昭和歌謡、演歌を中心に決めて、オープニングに有名なクラシックの曲を聴きやすくアレンジしたものを演奏した。メロディーだけでなく、演奏者が歌う事でより楽しんで頂けるステージにするために、弾き歌い、叩き歌いにチャレンジした。結果、皆さん一緒に口ずさんでくださり、歌が聞けて良かったとの声をいただいた。また、初夏の演奏の際は、お客様の体調を考え、こまめな休憩を挟めるよう、2分～3分の曲を5～6曲とトークを多めに挟む構成にした。

参加者の皆さんとお話して感じたことは、やはり人とお話をすることでストレスを発散できたり、何かを得られるということ。演奏者にとっても感想を聞近に伺える機会となり、とても参考になったが、それだけではなく、他愛もない会話から、次に演奏してほしい曲などをリクエストとして皆さんが提案してくださり、コミュニケーションをとってから、その中で得たヒントをもとにプログラムを組んで演奏するのも良いのではないかと感じた。

コロナ禍で演奏機会を失った演奏家と、密になってしまう可能性からライブやコンサートに行けていないお客様を繋ぐとても良い企画だと思う。

#### ④プログラムのアウトカム

主要な目的である行政連携については、社会福祉協議会の担当者や活動場所の方々から好評の言葉をいただいております、来年度にもつながる関係性を構築することができた。来年度以降は企画の質をさらに上げるため、アンケート等の手段を用い、社会福祉協議会の担当者や活動場所の方々の感想や意見についてより丁寧に入手できる仕組みを作っていく。

なお、演奏会後のエピソードとして、アーティストとのコミュニケーションを図ろうとする参加者が複数見られた。アーティストに「あなたたちのコンサートは文化の家に行けば見られるの？ 次はいつあるの？」あるいは「あなたは大学生？ どこに住んでいるの？」などと尋ねる人が複数見られた。ここからは意欲を失いがちな高齢者に、もし違う場所で演奏が聴けるなら、そこに行きたいと思う気持ちを抱いていただくことができたのではないかと考える。

なお、福井医院の方々にはコンサート後、アーティストに飲み物やお菓子を提供し、休んでいくように促し、サインや写真を撮らせてほしいと頼むなど、非常に積極的な関わりが見られた。実施先の福井医院では、企画への協力のみならず、彼ら自身が活動を盛り上げ、広げる側になるという動きが見られた。

創造スタッフが経験を積む場としても有効に機能し、アーティストとしての自己実現や、チャレンジとは少し異なる、普段劇場にはあまり足を運ばない年配のお客様が最大限に楽しめるプログラム等を考えるよい機会となった。

#### ⑤プログラムの効率性

文化の家職員は通常、2名派遣されている。それぞれの業務内容は以下の通りである。

共通：楽器（電子ピアノ）、アンプの運搬

A サロン主催者への挨拶、状況をみつつ社会福祉協議会や、実施先の人々とのコミュニケーション

B 会場準備（電子ピアノのセッティング、音のバランスチェック、演奏位置の確認など）、記録写真の撮影

今年度、会場となった福井医院については、常に協力的で、電源や駐車場、参加者用の椅子などを貸していただくことができた。こちらからは、電子ピアノの用意のみで素早く準備することができた。加えてサロン会場のスタッフが椅子の準備や参加者の声かけなどを行うことにより、ともに企画の準備を進めることができた。

### ・ふくしであーと（バルコニーコンサート）

#### ① プログラムに対するニーズ（ニーズアセスメント）

2020年度、コロナ感染防止対策の徹底により、音楽活動に対する施設のニーズは高まった。4月には社会福祉施設からボランティアが消え、職員は感染させてはならないという使命感から常に緊張を強いられ、仕事量の増大や社会との分断に直面し、心身ともにかなり追い詰められた状態にあった。2020年度は入所者も職員も、新型コロナウイルス感染を恐れつつ、コロナ感染の恐れに影響されない豊かな時間、癒しの機会を求めていたと思われる。実際、アーティストらによる生演奏は入所者もさることながら、この企画は職員の皆様に大変喜んでいただくことができた。

演奏後の手ごたえはこれまでの活動をしのぐものがあった。職員や利用者からの「また来てほしい」との声が相次いだことから、この企画は入所者および職員の声にならない切実なニーズを十分に満たしていたと考えられる。

#### ② プログラムの設計

昨年度末に立てたプログラムは4月以降、大幅な変更を余儀なくされた。屋外演奏とビデオレターという形になったが、結果としては重点施設と位置付けていた法人やこれまでよい関係を築いてきた施設と強い信頼関係を構築し、次につながる展開を導き出すことができた。演奏内容で言えば、フランチャイズアーティストも2年目となり、高齢者の話を聞く機会が増えた経験も活かしつつ、プログラムに幅を持たせることができるようになった。また、編曲と即興ができるアーティストをメンバーに加えたことにより、聴き手の要望に即座に対応することができるようになった。

③プログラムの実施およびサービス提供 (a.意図した目標に沿って、適切な対象に対し、確実に実行されているかどうか b.必要な人材や資源を組織化し、最大活用できているかどうか)

a. について、実施可能な対象に対し、丁寧なコミュニケーションを重ね、確実に実行することができた。ただし、刻々と変わる状況のなか、素早い対応ができなかった点、活動の目標を明確に絞れなかった点は今後の課題である。振り返れば、社会福祉施設の職員が本格的な感染防止対策を実行するようになったのは3月ごろである。4月から5月の緊急事態宣言が出ている間、職員の緊張と不安は一気に高まっていった。一方、文化の家が愛知たいようの杜でふくしであーとを行うことができたのは6月末、夢の家にリクエスト曲によるビデオレターを届けることができたのは10月である。この頃になると感染への不安はかなり落ち着き、市中で音楽コンサートが復活し出していた。結果としてふくしであーとの対象施設からは高い評価を得ることができたが、実施時期が適切であったかという点で言えば、遅きに失したと言わざるを得ない。

b.について、福祉事業の担当者とフランチャイズアーティストで実施することが前提となっていたが、果たしてその枠を遵守する必要はあったのだろうか。全国各地の福祉施設がコロナ感染を防ぐべく緊張を強いられていたことを考えると、長久手市のみで考えても、ふくしであーとを求めていた施設は多く存在したのではないかと思われる。実際に活動の対象とした施設(愛知たいようの杜)について言えば、5月段階ですでに複数箇所からオファーが寄せられていた。もしこのニーズに即対応していれば、4月、遅くとも5月に複数回、屋外演奏を実施することができたのではないだろうか。加えてアーティスト達の支援という点においても課題が残ったと考える。アーティスト達もまた、3月ごろから演奏機会が激減し、大きな打撃を受けていた。彼らの活動の場を広げることは、どこよりも文化の家がまず、着手すべき事柄ではなかったか。文化の家の総力をもってすれば、4月の段階において地元の福祉施設のニーズを掘り起こし、アーティストらの活躍の場を増やすことは可能であったろう。文化の家は長久手市のくらし文化部に属する行政機関である。行政機関として、必要な人材や資源を幅広い視点から速やかに組織化できているか、それらを最大活用できているかどうかという点で今一度、活動のあり方を考える必要があるのではないだろうか。

#### ④ プログラムのアウトカム

活動を行った夢の家、愛知たいようの杜ともに入所者や職員に大変満足していただき、先方からは次の活動の展開につながる関係性を築くことができた。ビデオレターの閲覧、野外での演奏という形を通じて、移動困難な方々に質の高い音楽を提供することができた。また、愛知たいようの杜については、職員の皆様と福祉の価値観&課題(入所者&利用者の余暇活動や外出機械の減少による心身機能の低下)を共有し、課題解決に寄与する芸術文化活動を行うことができた。この法人に関しては回数を重ねるなか、再現性があり、よい実践ができるパターンを創り出すことができるようになっていく。フランチャイズアーティストにお

いても聴き手と支援を超えた関係を構築することができ、豊かな時間を「共有する」感覚を持つことができるようになった。

昨年度の報告書では、福祉事業として行うプログラムのアウトカムを適切に評価するのは難しいという認識のもと「全体を通して、どのようなアウトカムを望むことができるのかについて、福祉の価値観に基づき確認していきたい」との指摘を行っている。その状況は今も変わらないが、今年は試行錯誤が続くなか、次につながる活動、再現性のある活動の形をいくつか見出すことができた。この「次につながる活動、再現性のある活動を創造することができたかどうか」は、このふくしであつとの成果を測る一つの指標になると考える。この点をふまえつつ、来年度はコロナ禍のもとで行う福祉事業について、アウトカム評価を適切に行う方法の開発が課題である。

#### ⑤ プログラムの効率性

ビデオレターについては作成に多くの時間と費用がかかったが、コロナ禍のなか、ビデオレターという新しいツールの可能性を見極めることができたという点で、チャレンジする意義はあった。アーティストについても、新しく編曲や即興ができるピアニストが加わったことにより、より幅の広いプログラムを実施することが可能になった。

バルコニーコンサートについては通常、アーティスト2～3名、文化の家職員は2～3名体制で行っている。役割分担は以下の通りである。

共通：楽器（電子ピアノ）、アンプの運搬

スタッフ A 訪問先担当者への挨拶、状況をみつつ担当者や実施先の人々とコミュニケーション、依頼者側と開始時間を調整（様子を見て）

スタッフ B 会場準備（電子ピアノのセッティング、音のバランスチェック、演奏位置の確認）、記録写真の撮影

スタッフ C 動画撮影（毎回ではない）

演奏会開始の1時間ほど前に文化の家職員が現場に入り、施設への最終確認と機材の準備を行い、30分ほど前からアーティストが現場での音出し等を行う。施設側の様子を見ながら、臨機応変に開始時間を調整することも必要である。

来年度、文化の家の業務の主軸となる劇場公演と、福祉事業とのバランスが問題になった際、アーティスト2名、職員1名は最低限必要だが、B（およびC）の業務については必ずしも職員でなくても遂行可能な業務内容であるため、職員の派遣ではなくボランティアなどの協力を得ることを考えてもよいかもしれない。

バルコニーコンサートについては来年度、フローチャート化やマニュアル化に取り組み、

他自治体や団体が行いたいと思ったときに参考にできるよう、実施方法をまとめていくことが課題となる。

来年度以降の企画については未定であるが、このような活動は、ただ効率的に実施できればよいというものではない。アーティストの成長や育成においてどのような効果があるのかという視点は大切にしていきたいし、たとえ新たに費用やマンパワーが発生するにしても、聴き手にQOLの向上や生きがいをもたらすという効果が見込めるのであれば、行うことに大きな意義がある。また、聴覚だけに頼らない活動（ダンスや演劇等）を企画立案することは、これまで関心を持たなかった層を惹きつけるという点や、次につながる活動、再現性のある活動を生み出すという点から検討に値する。

来年度は今年度行った事業の成果を活かしていくとともに、表面的な費用面の効率にとられることなく、スリム化を図りつつも、力を入れるべきところには必要な予算とマンパワーを配分していくことを提案していきたい。

## おわりに

1年間の総括を行った今、改めて、先の見えないなかで行った音楽活動の意義の大きさを痛感している。シンプルに音楽を届けるという活動がこれほどまでに苦境に陥ったことは、今までにあったらうか。同時に、これほどまでに音楽が人々を勇気づけたことも、今までにあったらうか。文化の家のスタッフも、活動に関わったアーティスト達も、刻々と変わる事態に翻弄されながら、でき得る限りの奮闘を続けた。この1年の活動は限られたものとなったが、次につながる、再現性のある活動を創造したという点で、確実な前進を遂げることができたと考える。

ただし、課題も残されている。文化の家は長久手市のくらし文化部に属する行政機関である。公務員である職員には、常に念頭に置くべき社会のニーズがあり、それらを踏まえたうえで実施すべき事業を発想し、市民の課題解決につながる手段を創造していくことが求められる。自分たちの実施するプログラムは、果たして社会的な事業と言えるのか。期待した効果を生んでいるのか。市民に活動に伴う判断根拠をきちんと示すことができるのか。この先、財政の緊縮が予想されるなか、これらの点は行政機関が行う活動として、常に留意していかねばならないだろう。それから福祉事業としてアウトリーチを行うのであれば、まずは「相手に沿う」という姿勢、相手の土俵で勝負することが基本となる。これまでのように、アウトリーチ先は、文化の家の基準に沿うところのみを対象にするのか。行政機関が行う活動、かつ福祉の事業であると考えた場合にそれでよいのか、判断はどうあるべきなのかが問われている。

文化の家の福祉事業は年度末をもって一区切りを迎える。しかし、今年度で終わりではない。不安は大きい、やるべきことは明らかになりつつある。2021年度がどのような年になっても、今までと同様、一つひとつの事業に丁寧に向き合い、人々との出会いを大切にしながら事業を創り上げていきたい。そして、音楽の持つ力を多くの人たちに伝え、暮らしを豊かにしていくことが私たちのめざすべき目標である。

2021年3月31日

日本福祉大学 社会福祉学部 湯原悦子

長久手市文化の家 フランチャイズアーティスト 石川貴憲

長久手市文化の家 2020 年度 福祉事業評価報告書

発行日 2021 年 3 月 31 日

執筆 湯原悦子、石川貴憲

編集 長久手市文化の家

発行 長久手市文化の家

〒480-1166 愛知県長久手市野田農 201 番地

電話 : 0561-61-3411